



# スカッシュサークル 聞こくや会

大会がないなら作ればいい。  
上級者も初心者も  
対等に勝負できる貴重な場所

相手の動きを予想し、常に二手、三手先を読んで球を打つ。イメージ通りの試合運びができた時の喜びは大きい。

四角い空間の中、壁を利用してラリーを行う球技「スカッシュ」。壁に打ち込む角度や強度によって球の軌道は大きく変わり、他の球技にはない複雑な駆け引きを行うことができる。

スカッシュサークル「聞こくや会」は、そんなスカッシュにのめり込んだ大人たちのグループだ。主な活動は数カ月に一度行われるリーグ戦やトーナメント戦などの大会で、各自が日々培った技術を思い切り發揮している。

会を結成したのは山下昌樹さん。学生時代はラグビーやテニスをやっており、久しぶりにテニスをやるうとスポーツクラブに通い始めたところ、クラブの仲間にスカッシュに誘われた。一度やってみると、壁を使ってボールをコントロールする面白さに目覚め、「一気にのめりこんだ」。

「そのうち試合がやりたくなったんですが、初心者が参加できるような大会がなくて。それならば自分が大大会を開こうとメンバーを募りました」。知人はもちろん、練習先のコートで見かけた知らない人にも積極的に声をかけ、試合に誘った。そうして迎えた2008年の第二回大会。集まったメンバーの頭文字を組み合わせた「KIKOYA」となり、また一人ひとりの意見や審判の言うことを素直に聞こくや会という意味を込め、サークル名を聞こくや会と命名した。これまで主催してきた大会は54

回。多い時は月に一度、現在は3、4カ月に一度大会を開き、優勝者にはさやかな景品を送る。

大会の特徴は、各自のレベルに合ったハンを設けていること。「例えば上級者のAさんと初心者のBさんの試合の場合、Bさんに5点加点した状態でスタートします。こうすれば対等に戦えますし、初心者でも勝つことができているんです」と山下さん。直近の大会では、ジャンプスカッシュランキング上位の成績を持つ猛者を迎えてリーグ戦を行った。「ものすごいハンをもらって対決しましたが、結局勝てませんでしたね」と笑う。

この日は常連メンバーが集結。前半の練習では、フラインプレーが出る「おおー！」とどよめき、凡ミスが出ると「わっはっは」と笑いが起きるなど、実に楽しげだ。しかし試合になると表情は一変。際どいショットが次々と繰り出され、コート内を2人の選手が駆け巡る。試合を観戦するメンバーたちの目つきも真剣で、観るのもやるのも面白い、スカッシュが好きでたまらないという気持ちがあふれていた。

二度試合に参加すれば、誰でも聞こくや会のメンバーです」という山下さんは、今も色々な人に声をかけ続けている。現在の会員数は30人ほど。これからもその数は続々と増えていきそうだ。

## チームメイト



**本吉 隆士 さん**  
1966年生まれ、スカッシュ歴9年ほど。「スカッシュの練習をしていたところ、山下さんに誘われました。第7回の大会から出ています。仲間と打ち合いを楽しみながら、思い切り汗をかけるのがスカッシュの魅力です」



1.5.4.2人1組になり、コートの特定の場所にボールを返すというコントロール練習。紅一点の西屋満子さんは、日本スカッシュ協会の公式大会に出場するなど、試合経験が豊富。



5. 試合には審判と記録係が必須。山下さんは審判3級の資格を取得し、公正な試合を見守っている。6. 中央が代表の山下さん。ちょっとした待ち時間でもメンバー同士で話が弾む。7. ラケットはコンパクトで軽い。ゴム製の球はゴルフボールほどの大きさだ。



スカッシュを始めるまで、球技は本格的にやったことがなかったというメンバーも。聞こくや会の大会を筆頭に、実戦経験を積みながら腕を上げてきた。